（様式１）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	歴史的な技術文化遺産としての十二貫野用水の再評価		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	教養教育センター	准教授	鈴木浩司

研究結果の概要

十二貫野用水（全長約 23km）はそれまで水資源に乏しく原野であった十二貫野台地（黒部市）を灌漑するために新川郡出身の椎名道三により江戸時代後期（1841 年）に当時の技術の粋を集めた作られた用水である。現在では，トンネル化及び暗渠化により近代化され，当時の姿を消しつつある。急峻な山地を縫うように作られた十二貫野用水は当時としては洗練された土木技術の他に，高度な測量技術も必要であっただろう。それらは多くの先人たちの知恵と経験，努力の結晶であり，その上に我々現代人の豊かな生活が成り立っている。本研究の目的は，特に先人たちの遺産を直接見ることができる旧十二貫野用水路の現状を調査し，地域遺産としての『十二貫野用水』を再評価することである。

本研究では，終点の十二貫野湖から取水口の尾沼谷まで用水路全長を実際に歩き，当時の様子を残している用水路跡や手掘りトンネルが現在どのような状況になっているのかを記録した。暗渠化した部分は林道として使われているが，新たに掘削された４つのトンネルにより使われなくなった旧用水路跡は近代化以前のまま山中に残されている。使われなくなった旧用水路は現在もその姿を見ることができるが，落葉や土砂で埋まったり，崩落している場所もあった。手掘りトンネルもいくつかは土砂に埋もれており，やがてその存在は分からなくなってしまうであろう。また，各所に十二貫野用水の歴史と文化について説明した案内板が設置されているが，夏に訪れると雑草の藪の中に埋もれてしまっていたものもあった。つまり，現代に生きる我々が常に意識していないと，地域社会の発展に尽くした先人たちが残した遺産は次第に失われてしまうのではないかと思われた。並行して，教養ゼミにおいて富山県内の用水路の掘削について学習し，現地調査も行い，問題点を議論した。

本研究を通じて，十二貫野用水は潜在的には地域の歴史の一つとして受け継がれていることが分かった。また，当時の技術や文化を知るために残しておくべき場所がいくつか明らかになったが，一方で，それら山中に放置された旧用水跡は管理されることもなく，年月とともに崩壊し，やがては見ることができなくなると予想された。本研究の結果については紀要にて報告した。

鈴木浩司．2020．地域遺産としての旧『十二貫野用水路』の現状と再評価．富山県立大学紀要第 30 巻 60-66.

今後の展開

旧『十二貫野用水』の現状について把握し，地域の歴史を知るために残すべき貴重な場所を見出すことができた。しかし，山中においてはそれらは年月とともに崩壊してくと思われる。そこで，地域住民とともに少しでもそれら歴史資料を残し，次世代に伝えるべき活動をしていく必要がある。